

伝書鳩

第11号



井上靖記念文化財団

愛する人に

井上靖

洪水のように、
大きく、烈しく、
生きなくてもいい。
清水のように、あの岩蔭の、
人目につかぬ滴りのように、
清らかに、ひそやかに、自ら^{かがや}耀いて、
生きて貰いたい。

さくらの花のように、
万^{ぼん}朶を飾らなくてもいい。
梅のように、
あの白い五枚の花弁のように、
香ぐわしく、きびしく、
まなこ見張り、
寒夜、なおひらくがいい。

壮大な天の曲、神の声は、
よし聞けなくとも、
風の音に、
あの木々をゆるがせ、
野をわたり、
村を二つに割るものの音に、
耳を傾けよ。

愛する人よ、
夢みなくてもいい。
去年のように、
また来年そうであるように、
この新しき春の陽の中に、
醒めてあれ。
白き石のおもてのように醒めてあれ。



愛する人に(詩) 井上靖……………2

ご挨拶とご報告 井上修一……………6

『丸山薫全集』に触れて 佐藤吉之輔……………8

井上靖に惚れた男 坂入公一氏を偲んで 浅岡邦雄……………12

井上靖未発表資料*2
行軍開始まで「中国行軍日記」補遺(監修・解説 曾根博義)……………16

父の休息 家族の撮った写真から 井上卓也……………30

☞ 図書だより①……………33

私の備忘録より 浦城いくよ……………34

平成二十一年度 事業報告 井上修一……………44

☞ 図書だより②……………49

鳩のカット 福井欧夏
花のカット 黒田佳子

ご挨拶とご報告

井上修一（井上靖記念文化財団理事長）

井上靖記念文化財団を設立いたしましたして、早くも来年で二十年になります。その間、皆様からは絶大なのご支援、ご協力をいただき、誠に有り難うございました。心より御礼申し上げます。

さて、現在、政府が進めております全国の財団法人改革を受けて、本財団の理事会は財団の今後の在り方を一般財団法人にすることに決断いたしました。これに伴って平成二十三年度はさまざまな変更と選択を行います。一昨年の十五回をもちまして一区切りを付けました井上靖文化賞も、一般財団法人への移行と同時に形を変えて再開する方向で検討しております。ぜひとも、皆様のお知恵を拝借させていただきたいと存じます。

なお、直接財団に関することではありませんが、皆様に喜んでいただけるお知らせがあります。世田谷区桜にあります父の家が、平成二十三年度に旭川市立井上靖記念館の敷地

に移築され、以後、旭川市で維持管理をしていただけることになりました。誕生の地に終の棲家を移すことができ、父の人生の円環が閉じることとなります。ご決断くださった旭川市ならびに井上靖記念館の皆様には、この場を借りて、心よりの感謝を申し述べさせていただきます。

また、祖母の老耄の過程を描いた父の作品『わが母の記』が、松竹で映画化されることになりました。監督は原田真人氏です。父役には役所広司、祖母役には樹木希林、妹役には宮崎あおいの皆さんがご出演くださいます。公開は来年の四月以降ですが、皆様とご一緒に完成を楽しみに待ちたいと思います。

『丸山薫全集』に触れて

佐藤吉之輔（元角川書店監査役）

昨年八月、私が永く勤めた角川書店が、『新編丸山薫全集』（全六巻）を刊行した。

最初の刊行は、昭和五十一年秋。その二年前に、愛知県豊橋市で七十五歳で亡くなった詩人丸山薫の三周忌追悼出版だった。今回は、その後、研究者らによって発掘・収集された未収録作品等を一冊、資料編として補巻した復刊である。

薫は、戦前、堀辰雄、三好達治と詩誌「四季」を創刊、角川源義が書店の草創期、その継承を図り、山形県岩根沢に疎開中の薫に、編集長就任を求めたことがある。こうした縁から、薫の死の翌年、桑原武夫氏から源義に全集出版の打診があり、源義が応諾した。

当時、編集部に在籍していた私が、担当を命じられ、

直ぐに編集作業に入った。

監修は、桑原武夫、井上靖、吉村正一郎、竹中郁、八木憲爾の五氏。桑原、吉村の仏文学両氏は、三高時代の薫の同級生。八木氏は、詩集出版の版元として知られる「潮流社」社長。井上先生の参加は、桑原氏の強い推薦によるものだった、と記憶する。

四谷の福田家で何回かの監修・編集会議を持ったが、源義は肝臓ガン発病のため、一度きりの参加で終わった。京都弁の滑らかな桑原氏の発言で、会議はいつも賑やかだった。

その中で、井上先生は、多弁ではないが、的確な意見を述べられた。

各巻解説は、監修者が分担執筆することになり、井

上先生には、第二巻の担当をお願いすることになった。この巻は、昭和五十一年十一月に刊行されているから、原稿頂戴は、その年の秋口頃であったろうか。

薫の後半生の刊行詩集六冊を収めた本文の校正刷りを前もってお届けし、約束の日の午後、井上邸にお伺いした。

藍色の和服姿の先生が、すぐ応接間に顔を出され、

「今、やっていますから」と言っ、奥の書斎に戻られた。お手伝いさんが運んでくれたお茶を啜りながら四十分待つと、先生が再び現れた。

真向かいのソファに腰を下ろし、テーブルの上に、黙って本文ゲラと書き上げた原稿を置かれた。

ゲラは、数箇所斜めの折り畳みを見せていた。読んで、心を止められた箇所なのだろう、と思った。二つに畳まれた原稿を手にした時、口を開かれた。

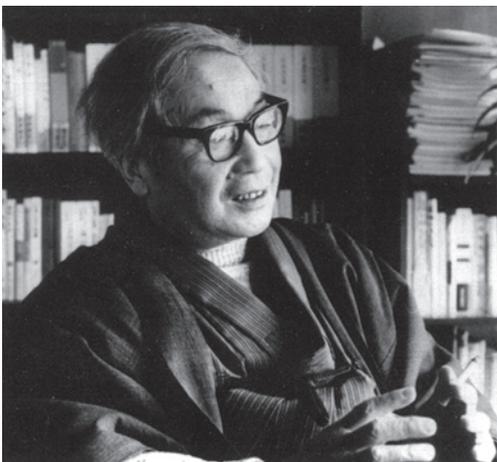
「いい、一度読んでみて下さい」

眼の周りと頬が、赤い。眼差しにも、強い光があった。

精魂を傾けて机に向かわれていた興奮の名残の様だった。これが、作家の、井上先生の集中力なのだ、と思いつながら、緊張して十四、五枚の原稿に眼を走らせた。

太目の万年筆の一字一字に、気迫が込められた様な力の籠もった内容だった。

自分の孤独と憂愁を、海、山、川、船、木々、花など、身の周りを取り囲む様々な物象に仮託して謳い、



詩人・丸山薫

現代詩に一つの新たな窓を開いた詩業を辿りつつ、迫り来る死に向かう薫の最晩年の心境と作品に触れている。

死の前年に出版した詩集『蟻のいる風景』に「恥辱の形」と題された作品がある。

月をよぎる地球の影でもない

太陽を隠す月の影でもない あれは

宇宙の圏外から差す 黄昏の影

いつかは必ず僕にも這いよってくる

僕の耳目を覆い 呼吸を塞ぐとき

僕は僕を離れる

いっぴきの蚤といっしょに

朽葉いろに変わって爪先を延ばした僕

もはや僕ではない衆目の中の恥辱の形を

なおも白布をはねのけ覗こうとするのは誰か！

(後略)

解説の末尾で、この詩に触れ、「この作品に於いてほど、私は丸山薫を詩人だと感じたことはない」と、書かれている。

詩人と言われる者も多くは、死に臨んで、生涯への決別の言葉を、多少座り直して、あるいは開き直って書き記しているが、丸山薫にはそうしたものは見られない。そうした野暮ったいことを自分に禁じているか

のようであるとして、「かれは初めから終わりまで詩人であった。詩人からどこへも踏み出さなかった。みごとと言うほかないと思う」と、結ばれている。

先生は、小説の世界を目指し、流行作家になられたが、その作品の核には、清澄で、揺るぎない詩精神がある。事実、小説に併せて、詩作を忘れることなく、詩集の出版も重ねられている。井上文学にとって、詩は魂の故郷と言えるだろう。

〈先生は、詩を心から愛している。詩を本当に大切にされている〉。

そう思いながら、私の心をかすかな感動が掠めた。

「ごつても、ありがとうございました」

それだけを言って、頭を下げた。

「よろしかったですか」

先生の目尻に、いつもの優しい笑みが戻った。

同じ感想に心を打たれた思い出が、もう一つある。

すでに一、二度喋ったり、書いたりしたことだが、

角川書店が、若い読者向きに、「カラー版」と謳って、日本と世界の名詩に風景写真をあしらひ、シリーズ企画として出版したことがある。この時、社内の宣伝部が、「詩はあなたの心のおしゃれです」という宣伝コピーを考案、ポスターや新聞に載せた。

ある午後、井上邸に伺うと、先生が珍しく不機嫌な顔を、私に向けられた。

「今朝の、カラー版とかいう詩集の広告。あれ角川でしたか」

「はい」と頷くと、加えられた。

「おたくの宣伝の人に、電話でも入れようと思ったんですが、近頃の出版企画で、あれ程嫌な宣伝文句を見たことはありませんね。詩は、心のおしゃれ何かじゃありませんよ。人間の心の、奥底からの叫びじゃあ



りませんか。ちがいますか」

返す言葉がなかった。

先生から、お小言めいた言葉を戴いたのは、これが最初で最後だった。

井上靖に惚れた男

坂入公一氏を偲んで

浅岡邦雄（中京大学准教授）

「私はね、井上靖に惚れたとしか、言いようがないんですね」

自ら編纂した『井上靖ノート』を手に、坂入公一さかいらこういち氏は太く歯切れのいい声でそう言って、照れくさそうに笑った。

四谷の坂入氏のお宅で話を伺ったのは、今から三十年以上前のことである。その頃は、ある私立大学の図書館に勤めていた。大学図書館員の研究会のひとつに「書誌作成分科会」があり、勉強のためそこに参加していた。同会では書誌作成の勉強のほかに、毎回書誌を作成した方や書物関係の著書を刊行された方を招いて、講演を聞くのが恒例であった。『井上靖ノ

ト』を出版されたばかりの坂入氏に来ていただいたのは、昭和五十三年の春ではなかったか。

『井上靖ノート』は、作家井上靖の全作品を詳細に記録することを企図して作成された個人書誌である。A五判、横長、三一七ページ、著書目録・小説目録・小説初出誌紙一覧・詩目録・作品年表・参考文献・初期作品ノートその他から構成される。冒頭に、井上靖の詩「愛する人に」が置かれている。同書は、初めて一書にまとめられた井上靖の書誌ということもあってか、『東京新聞』をはじめ、『週刊読書人』『図書新聞』『日本古書通信』『出版ニュース』など、さらに地方新聞にも取り上げられた。

坂入宅に伺ったのは、確か講演していただく何日か

前であったと記憶している。同会メンバーのひとり、書物関係のリトルマガジンを発行していて、そこに坂入氏と『井上靖ノート』を紹介するよう頼まれ、そのためのインタビューであった。同じ研究会のNさんとともに、事前に伺った住所をたよりに訪ねた。



井上靖氏と坂入公一氏（『井上靖ノート』より）

坂入氏の話は、その話しぶりと相俟って、時間を忘れるほど興味深く愉快なものだった。氏が気管支拡張症で入院した折、同室の青年から勧められて読んだ「猟銃」「通夜の客」が、井上文学との出会いであったという。平明な文章で、深いもの、高いものに触れた表現に惚れこみ、以後井上作品に深く傾倒していくことになる。氏が五十歳になろうとする頃であった。退院後茨城から上京して、自由民主党本部に籍をおき、機関紙『自由新報』の編集等に携わるが、余暇のすべては井上靖の単行書や掲載雑誌の収集にあてられることとなる。古書店地図をたよりに、都内の古書店はすべてまわったという。勤務先に隣接する国会図書館へは日参することになる。こうした資料収集を面白そうに語る坂入氏が、忘れられないエピソードとして仕方話で話してくれたのは、それまでどこの古書店や古書即売会にも姿を見せない〈幻の本〉、有文堂版『流転』の一件である。ある時、場末の小さな古本屋に何気なく入った氏の前に、この〈幻の本〉が姿を現す。激しく波打つ動悸を抑えながら、主人の七十円と

いう言い値を、「こんな汚れた本、まけるよ」とわざと値切るふりをして（結局値切つてはもらえなかったが）、手に入れた。

「心臓がばくばくして、早くその本をひったくって店を飛び出したかったけど、わざと値切ったのは、古本屋の親父をいたわったわけね。こちらが喜んで舞いあがったら、親父は寝込んでじゃうよ」

嬉しそうにそう言うのだった。

坂入氏へのインタビューは、その後「坂入公一氏と『井上靖ノート』」と題して雑誌に載せてもらった。出来上がった雑誌をお送りして、それで終われば氏との縁もそこまでであったろう。その後しばらくして、ある雑誌の中に『井上靖ノート』に未収録の文献を見つけた。しばし考えたのち、そのコピーを送ると、氏から丁寧な礼状が届いた。しばらくたって、また手紙をいただいた。井上作品の韓国語訳があることがその後分かったが、韓国語書籍を扱っている書店を知っているなら教えてほしい、とのことである。図書館員だ

から、あるいはそうした情報を持っているのでは、と思われたのだろう。あらゆる情報網を駆使して、御要望に応えたことはいまでもない。そのことがあつてから、氏とのあいだに手紙のやり取りが始まった。井上靖にすることが主であったが、そのうち、休みの日にでも遊びにいらつしやい、とあつた。こちらも若かったから、遠慮もなく時折休日に四谷のお宅にお邪魔するようになる。いつも奥様ともども快く迎えてくれて、とりとめもない話に時間をすごすことになるが、何かの話の折、坂入氏はある固有名詞がどうしても思い出せないことがあつた。しばらく考えていたが、それでも浮かんでこない。「○○○○ですか」と言うと、

「ああ、それぞれ」と言つてから、「あなた若いのに、随分古いこと知っているなあ」と笑われた。そんなこともあつて、「若いけど話せる奴」と思ってもらえたのかも知れない。この時坂入氏七十歳、私は三十歳であったから、年齢差は親子以上のものがあつた。

『井上靖ノート』刊行の翌年、井上靖の随筆から三十編を精選して、総革製三百部限定版『故郷の鏡』を

出版した。『井上靖ノート』と同様、風書房からの発行。風書房は、氏が退職後に設立した出版社である。『故郷の鏡』刊行の前であったか後であったか定かでないが、こんなことを言われたことがある。

「もしできるなら、限定三部の井上靖の本を作りたいね。一部を井上先生に、一部は自分用に、最後の一部をお売りします、といつてね」

古希をすぎた年齢ではあつたが、坂入氏の頭のなかにはいくつもの企画が明滅していたにちがいない。井上靖全著書の書影をカラー版で載せ、ひとつひとつに解説を付したものを作りたい、と考えたこともあつた。でも、見積をとってみたら、一冊が何万円にもなってしまうので、とても売り物にはならないから諦めた、と笑いながら語つたこともある。

お宅にお邪魔することが重なるにつれ、それまで触れることもなかった御自身の来し方の一端を、ふと洩らされることがあつた。そんな時、どう受けとめていいのか、私のなかでとまどいが無かつたわけではない。そうした話の聴き手としては、私はまだ若かつた。

達筆な年賀状が珍しく途絶えたのは、知りあつて四年目、昭和五十七年の正月であつた。「どうしたのかな」と訝しく思ったのを今でも覚えていいる。それからひと月もたたない頃、ある新聞に坂入氏の死を報じる記事が載つた。死亡欄ではなく、井上靖一途に傾倒したひとりの男の死を伝えるものであつた。

『井上靖ノート』が完成したとき、氏は次の歌を詠んでいる。

ささやかな悲願ありわれの七十に

なほ幾許の命あらしめ

行軍開始まで

「中国行軍日記」補遺

本連載は井上靖の妻・ふみの没後、長男・修一がその遺品を整理した際に発見した未発表の日記・書簡・原稿・その他の資料を、新潮社版『井上靖全集』の編者、曾根博義氏に監修をお願いして、順次紹介していくものである。

連載二回目の今回は、井上靖が日中戦争初期に輜重兵しちゆうへい・特務兵として従軍した際に携帯していたと思われる大学ノートに記された、一九三七年九月二十三日から十月六日までの日記の翻刻である。二〇〇九年の『新潮』十二月号に「中国行軍日記」と題して紹介された日記は、一九三七年八月二十五日から翌年三月七日までのほぼ毎日の出来事を手帳に記録していたものであるが、今回紹介するノートの記載期間、九月二十三日から十月六日に相当する部分は記述がないか、略記にとどまっている。したがって、本資料は「中国行軍日記」の空白を埋めてくれる貴重なものといえる。

九月三日 野砲第三聯隊に応召

九月十六日 先発隊として出発

九月二十二日 午前五時 草津出発

午前八時 摩耶丸上船

九月二十四日 午前四時半 朝鮮釜山上陸

九月二十五日 午後四時十分 釜山発車

九月二十三日

午前十時門司着。自動車隊がこゝよりのる。その荷物の積込作業が四時まで。

四時釜山へ。門司の埠頭の見送りは盛大だった。玄海灘は美しい月明。夜光虫がポツカリ／＼光る。多分クラゲだろう。余興がある。ふみと旅行したい。何もかもみんな喜びそうな事ばかり。

九月二十四日

午前五時釜山着。二つの突端に囲まれたいい港。天然の良港とはこんなのをいふのだらう。下船の支度をしてゐると中隊長のお呼びだ。隊長室に行つてみると小松〔清〕がある。召集より一週間許り前偶然何年か振りで阪神電車の中で逢つたのに、またこんな所で逢ふ。自動車隊の隊長さんだ。兵站

ため新聞紙を持つ。少し憂鬱だ。汽船の時がむしろ羨しい。これで向ふ四日間！小便が怖くて酒にもあまり手が出ない。夜半雨になる。窓の小さい口を二つ塞いだので窒息しそうだ。人いきれと臭気。南京虫に十三ヶ所。胸が痛くて眼が時々さめる。沿線は非常な歓迎。夜半二時、大邱の歓迎は殊に物凄。鮮人の見送りが半数以上。

九月二十六日

四時、大田附近からうとく。灯火管制で昨夜七時頃よりねたので眠くはない。九時龍山。下車して顔を洗ふ。九時十分京城。京城は美しい。沿線の至る所に鮮人の見送り。内地人と異ひ、何か別な感慨がある。午後四時近く馬洞といふ山間の小駅で停車したので、ちよつと降りてみる。なだらかな草原の山の傾斜。西欧にでもありそうな小駅。相変わらず小ちやい子供たちが日の丸の旗を持つてばんざいく〜と飛廻つてゐる。友が柘榴を買ふ。三十銭で二十ヶ風呂敷に入れてくれる。実に甘味があつてうまい。

馬洞の前の何とかいふ小駅では鮮人の小さい生徒が先生に引率されて送りに出てゐた。こゝはを抜かしたのか忘れたのか、いきなり「御国を何百里」から唄ひ出した！「軍歌「戦友」の唄い出し」「国境は急行でまだ七時間ですよ」と防空監視といふ腕章をつけた鮮人が御愛想に答へた。この汽車は多分明早朝になるだらう。

沿線は牛の野放し。どんな山の中を列車が走つてゐても、鮮人の子供の万歳が窓を打つて流れる。

鼻のおばあさんが万歳の手をそのまま下げてお辞儀をした。丁寧。何か眼頭が熱くなつた。六時半平壤着。見送り盛大也。

夜半二時半国境。鴨緑江を越えて安東（丹東）。安東で新聞（大朝大毎）と十銭の羊羹二本買ふ。

九月二十七日

こゝから窓から国旗をふることを禁ぜらる。いよ／＼満洲国に入る。警備隊がつく。一同何となく緊張してゐる。寒い。昼用心のため腹巻をしておいたが、真綿のチョッキでもいゝくらゐ。六時めざめる。やはり寒い。線路には白い霜。鶏冠山駅で停車。朝食。始めて少し便通ある。もちろん線路だ。あたりの風景はまた朝鮮とは異ふ。

沿線、馬牛豚の放牧。実にのんびりした風景。伊豆の真冬の様な気候風景。実に静かでひえ／＼としてゐる。

途中から右側の窓をあけぬ様命令。匪賊の来襲を恐れての処置らしい。自分等の前の部隊は一名戦死したとの事。

五時十分頃奉天着。こゝから何処へ行くかまだわからない。ホームの記して判断すると山海関、北京方面の列車らしい。

奉天で夕食。やがて日が暮れるだらう。寝るばかりだ。遂にこゝで一泊に決まる。外出できないので夕食後直ぐねて了ふ。

九月二十八日

午後奉天の市中見学。忠霊塔。

奉天神社参詣、自由行動ゆるされないで珈琲ものめない。もう一晩こゝで一泊。

九月二十九日

午前十一時奉天発。

高粱畑は聞いてゐたとほり見はるかす茶褐色の波。樹木は川柳に似た樹木ばかり。大陸の雄大さを始めて知る。大阪東京でこせついでる人間にこれを見せてやり度い。六時錦州到着。満洲事変の古戦場。現在は人口一万、事変以来繁華になつたといふが、現在は大平原の中に、ぼつかり思ひがけず出現した大都会だ。こゝで夕食。

郊外に出ると一木一草尽く兵共の夢の跡ならざるはなし。塹ごゝの跡生々しい道路。無数の土まんじゆー(墓)。同胞の犠牲、そしてそれがもたらしたものを始めて現実に見た。美しい夕焼!

夜二時満支国境山海関。こゝに朝七時まで停車。弁当番。

九月三十日

いよ／＼是から敵地。沿線には二米おきに警戒兵が立つてゐるといふ。右は山、左は海。右側を雑

廿八日

午後奉天の市中見学。忠霊塔。奉天神社参詣、自由行動ゆるされないで珈琲ものめない。もう一晩こゝで一泊。

廿九日

午前十一時奉天発。高粱畑は聞いてゐたとほり見はるかす茶褐色の波。樹木は川柳に似た樹木ばかり。大陸の雄大さを始めて知る。大阪東京でこせついでる人間にこれを見せてやり度い。六時錦州到着。満洲事変の古戦場。現在は人口一万、事変以来繁華になつたといふが、現在は大平原の中に、ぼつかり思ひがけず出現した大都会だ。こゝで夕食。郊外に出ると一木一草尽く兵共の夢の跡ならざるはなし。塹ごゝの跡生々しい道路。無数の土まんじゆー(墓)。同胞の犠牲、そしてそれがもたらしたものを始めて現実に見た。美しい夕焼!

廿日

いよ／＼是から敵地。沿線には二米おきに警戒兵が立つてゐるといふ。右は山、左は海。右側を雑

9月28日～10月1日の日記(ノートの8・9ページ目)

の、凶囊等で警戒せよとの命あり。鉄砲には実弾、非常喇叭の□は周章でないよーにとの命。沿線は相変らずの壮大にして単調な風景。途中から雨。水田の広さに愕く。四時五十分塘沽着。附近に先時爆撃の跡をみる。海軍の占領したところ。夥しい土饅じう。これは支那戦死者を日本人が埋めたのであらう。こゝに来るまでの沿線各駅には十五六人づゝの警備兵がゐた。夜は随分淋しいだろー、国を訊けば北海道と云ひ、或は愛知と答雜多なり。塘沽近くで物凄いい水鳥の大群をみる。

夕方からぐつすり寝て了つて、眼ざめると天津。大変賑やかだがまた寝て了ふ。疲れてゐるのだ。

十月一日

夜半四時突如喇叭で起される。三分間でめしを食べ、武装を整へておけといふ。目的地豊台だ。

一、二小隊は車の積降し。三小隊は起立。八時半行軍開始。駅より七八丁の処で、塙の廻つた部落の住民を外に追出すまで待つ。この部落の大家は事変で逃げて了ひ、少数の住人と苦力の宿だつた由。午後四時頃宿舎に入る。そーとうなものである。アンペラを農家より徴発し、その上にテントを敷いて六畳位の上下二段部屋に十一人入る。食事をとりには駅までゆく。食事場の雑沓甚し。内地の人に見せたらさぞ驚くだろー。あゝ天高く馬肥ゆる秋ではある！

十月二日

午後本部の使役、佐藤伍長と廠衣部本部へ糧食その他の支給をうけに武装してゆく。別に仕事はな

いが、佐藤伍長の警戒役。兵隊五六十人荷物を運びにゆく。力仕事より楽だ。計手(主計助手)の話では馬は当分あたらぬ由。神よ。

十月三日

本部の使役。朝食后直ちに栢植省三(名古屋高商出)と二人、佐藤伍長の護衛をして北京に本部の買物へ。北京の駅でおりた第一印象は大変いい。支那の旧都だけに、今までの都市とは異ひ、さすがに見かける人人にも紳士淑女がゐる。「打倒害民之国的南京政府」と大書してある大布片が駅附近の門に垂らしてある。車中であつた立石榮氏の会社(国際運輸株式会社)にゆき万事厄介になる。立石隆一君の兄で、辻修二氏の妻君永井花子嬢の知人。元大毎野球団員。大変親切な人。その人に連れられて街に腕車(人力車)で買物に出る。クヌギの街路樹。苔の蒸した録石。モダン味とクラシックのよき調和。今まで見る都会の中で一番美しい。哈徳門の傍の広場でフランスの兵隊がフットボールをやつてゐる。一番賑やかな町で買物、山口君の懐中電池、コップ等。ロシア人の酒場で立石氏の御馳走になる。カツ・テキ・コヒー・アイスクリーム。みんなうまい。久しぶりで社会の風に当る。途中で通州にゆく立石氏と別れる。帰途立石氏の会社で朝日新聞の保定凱旋の記事をよみ、それをノートする。そこから、古今無双のポロトラツクに荷を積み帰台。(六〇)途中、馬具を買ふために支那街の真中に立寄り。他の二人が買物。自分一人、トラツクの張番。急に怖くなる。鉄砲を構へてたえず緊張する。一生のうちで或はこれが一番怖いスリルだつたかもしれない。六時帰台。

十月四日

夜半十二時突如非常呼集。匪賊の襲撃かと思つて飛起きると、駅に馬を曳きにゆくといふ。匪賊の襲撃の方がまだいい。

真暗い駅の構内で、貨車から苦力が一匹づつ馬を引出し、それを否応なしに引張る。生れて始めてだ。馬の総数四百二十五。殆んど総ての人間が怖らく馬は始めてだろー。全人、死物狂の気持だつたらー。真暗い、一寸先もわからぬ道を、黙々と必死に引いたのだ。周囲の人をみてもみんなピーンと怖さに緊張した顔！ 顔！ 顔！ 馬を車輛の間につなぐのも命がけ。乾草を与へ乍ら歩いたこの夜の気持は一生忘れまい。車輛の間につなぎ終ると夜が明けた。

昼はまた本部の使役。給料。夜十二時まで。

十月五日

昼本部。自分は予備軍にきまる。馬だけは持たぬ。やれ〜。

夜山口君が二合と牛肉の缶詰を買ってくる。二人でしんみりいっぱいやる。

十月六日

保定へと出発命令下る。明日四時起床。

解説

曾根博義

『新潮』二〇〇九年十二月号発表の井上靖「中国行軍日記」（原本は大阪毎日新聞社社員手帳）の空白ないし略記部分というのは、昭和十二年（一九三七）九月二十二日に宇品を出帆した摩耶丸が二十三日に門司に着き、翌二十四日に釜山に上陸してから、朝鮮半島を列車で北上、京城、平壤、奉天を経て十月一日に豊台に到着、十月七日から石家荘に向かつて行軍を開始するまでの約二週間である。「中国行軍日記」ではこの間の記事が次のようにごく簡単に記されていた。

九月二十三日（木）

午前十時門司着、碇泊。

午後四時門司発、釜山へ。

九月二十四日（金）

午前5時釜山着。

小松清に逢ふ（兵タン自動車56井上部隊第三小隊長）。

八時半釜山上陸。積込二時半終ると372汽船また

来る。大庁町、フヂ喫茶店。

九月二十六日（日）

4時10分発車。

十月一日（金）

朝4時豊台着。4時半下車。8時半出発。

十月七日（木）（20・7KM）

四時起床、出発準備。午前九時、保定に向つて行進。
（以下略）

このあと原手帳には行軍日記がカタカナ、横書きでビッシリ書き込まれることになるのだが、右に簡略化して記された、行軍開始までの九月二十三日から十月七日までの記事は、筆跡や筆記用具からみて、後日、

手帳のその日付欄に補記されたものではないかと推定される。

ところがどうしたわけか井上靖はその社員手帳とは別のノートにこの間の詳細な日記を書き残していた。ここに紹介、翻刻するのは、ノートで十一頁余りのその日記である。

表紙に「NOTE BOOK」と印刷されたそのノートは一頁二十三行の横罫入りの大学ノート(縦二〇×横一六センチ)で、最初の頁に、九月三日、応召／十六日、先発隊として名古屋を出発／二十二日、草津出発、摩耶丸上船／二十四日、釜山上陸／二十五日、同発車、などと、それまでの部隊の旅程をまとめて掲げたあと、頁を改めて九月二十五日、二十六日、二十四日、二十三日の順序で筆を進め、次の二十七日から十月六日まで日付順に記している。このことは、ノートが九月二十五日に釜山を発車した列車内でまずその日と次の日の日記から書き始められ、翌々日の二十七日の夜半に鴨緑江を渡って満洲に入ってから、釜山に着いた二十四日、門司を出発した二十三日と、遡って後に記さ

名の旅程と最下級の二等兵扱いだった輜重兵特務兵井上靖の体験した内容は本文にまかせるが、要約すれば以下の通りである。

釜山から上下二段の貨物列車に乗せられた新野部隊の兵士たちは大田、京城、平壤と朝鮮半島を北上した当時、半島全体は日本の統治下にあつたので、大都市の駅はもちろん山間の小駅でも日の丸や万歳や軍歌で子供から老人まで住民たちの大歓迎を受け、井上靖も感激のあまり眼頭を熱くすることもあつたが、やがて鴨緑江を渡って満洲に入ると緊張と不安が高まる。奉天では二泊するが、さてそこからどこへ連れて行かれるのかわからない。九月三十日早暁、満支国境の山海関に到着、いよいよこれから敵地だと思つくと不安は募るばかり。塘沽付近は海軍による激戦の跡が生々しい。十月一日、ようやく目的地とわかつた豊台に到着。翌日から井上靖は本部の使役を命じられ、伍長の護衛役として近くの北京に買物に出、緊張の中で北京の都の美しさを目の当たりにする。帰途、朝日新聞で保定凱旋の記事を読むが、そのノートは「中国行軍日記」の

れたことを示している。なお「中国行軍日記」では釜山発車が九月二十六日四時十分とされていたが、前後との関係から、このノートに記されているように、九月二十五日午後四時十分が正しいと思われる。

翻刻に当っては、読みやすさを考えて、冒頭を除いて、ノートに書かれた順でなく日付順に並べ換えた。また原文は冒頭一頁を除いて鉛筆で漢字ひらがなまじりの縦書きで書かれているが、「中国行軍日記」の原本である手帳と同じようにカタカナがまじることが多い。漢字やかなづかいには誤りも多いし、句読点があつたりしない箇所もある。翻刻に際しては「中国行軍日記」の場合と同様にカタカナは外来語などを除いてひらがなに改め、適宜、句読点を補つたほかは原文のままとした。かなづかいも原則として原文通りとし、統一しなかつた。ただし明らかな書き誤りはとくに断らないで正した。差別用語も当時の慣用に従つて原文のままにした。「」内は必要最低限の注、「□」は判読できなかった箇所(字数分)を示す。

釜山から豊台まで約二週間の新野輜重兵中隊約五百人である手帳のメモ欄に写されている。井上靖が一番怖れていたのは輜重兵としては当り前の馬を曳かさねることだった。真夜中に非常呼集で飛び起きると馬を連れに行けという。一人で馬を引張るのは初めてで怖くてたまらない。幸い二回の召集で形だけの歩兵の訓練を受けていたことと、本部の使役に使役されたおかげで、馬は免れるが(「やれ〜」)、かわりに重い銃を持たされることになる。ところがその銃の扱い方もよく知らなかつたらしいのだ。

すでに「中国行軍日記」で明らかになつたように、七日から始まる一か月余りの行軍で井上靖は自分がいかに弱い兵士であるかを身に沁みて体験しなければならなかつた。その予兆は行軍開始までのこのノートに早くもあらわれているといつてよいだろう。

父と食卓

井上卓也
(井上靖・次男)

父の日頃の暮らしぶりを思い起そうとすると、僕には、第一に父との食事が思い出される。僕が知っている限り、父は一年の半分くらいは家で夕食をしたと思う。あとの半分は旅行中であつたか、仕事を兼ねての外食であつた。文学賞のパーティであるとか、大切な客人を招いての料理屋食であつたとか。

さて家での食事には、誰がいただろうか。母、子供達、時には孫も。たまには親戚の者たちや、客人も。食卓は賑やかだつた。さてその食卓に供されたものは……。

父は食事で贅沢をする人ではなかつたと思う。母や手伝いの者が作ったものを喜んで食べた。いわゆる煮ものや煮魚を中心とした家庭料理である。ただ勿論好

みはあつた。さっぱりしたものより、どちらかと言えば、脂っこいものを好んだ。とくに書くべきものが山積み状態の時には、相当にエネルギーを消耗したらしく、「おい、ふみ、今日はウナギを食べたいな。ウナギが無いならトロでもいい」などと言っていたが、常のことではなかつた。

だいたい父は有名料理屋の美味、珍味を喜ぶ人ではなかつた。それは、ご馳走を食べ慣れてしまつたから……というのではなく、父の食に対する基本的な姿勢が、この辺りに隠れていた。

つまり、父の食の好みの基本は、客観的なご馳走にあるのではなく、自分が美味しいと思うものがご馳走なのであつた。その日しっかり仕事をした自分に対し

て、客観的なご馳走であるウナギを褒美として食べるのではなく、その日は、自分にはウナギが美味しいと思うから食べるのであつた。

どこかの料亭での会食から帰ってくると、父はよくこんなことを言っていた。

「どこのどなた様が煮たサトイモか知らんが、うちの芋の煮ころがしの方が余程うまい」

まあ父は、微妙な味を選び分ける舌を持ち合わせなかつたとも言えるし、母に言わせれば安上りだつたとも言える。

だいたい父は食べるというより飲むという人であつた。あれだけ大量の仕事をしながら、よく酒を飲む時間をつくつたものだといふことも感心する。

それでは、父が本当にご馳走と思うものは、何だつたらうか。

父がご馳走と思うものには明瞭な原点があつた。それは、「幼き日のこと」にも書かれているように、父を育ててくれ、あの土蔵の中で一緒に暮らした『おかのおばあさん』が「坊」のために作ってくれたものが、



自宅の居間での食事風景（1979年3月3日）。左端で横を向いているのが母・ふみ、中央が兄・修一とその娘・承子、右が父・靖。

ご馳走なのであった。

おかのおばあさんが作ってくれた代表的な料理といえば、有名な『おかのおばあさんのライスカレー』である。彼女が若い頃暮した下田で覚えた、ジャガイモとニンジンと缶詰めの大和煮の牛肉が入ったもので、当時としては大変にしゃれたものであったろう。

父には、このライスカレーが日本で一番うまいカレーライスであった。有名店のカレーライスなどは、カレーライスではなかった。

このカレーライスの他には、金山寺味噌のお茶漬けとか、ダイコン（千六本）の味噌汁とかが、父の思う「ご馳走」だった。僕などには、何の変哲もない粗食であったが……。

要するに、人は幼い頃美味しいと思ったものからは一生逃れることは出来ないらしく、僕も生まれてはじめて母に外で食べさせてもらったハンバーグが、今でも指折りのご馳走なのである。

さて、先にも書いたように、我家の夕食は勿論家族だけの時もあったが、客人を交えてということも度々

あった。そんな時、余程の人は別として、家族と同じものを召し上っていた。食卓は賑やかであった。特別な料理は無いと言っても、しょっちゅう宴会みたいになった。

そうした時、僕に懐しく思い出されるのは父の演説である。ご存知の様に父は多弁であった。酒が進むと子供達に言っても仕方のない、これからの仕事の話（特に孔子の話は百回以上聞いた）や、興が乗ると、天下国家論にまで及んだ。

「えっ、そうだろ、キミ」

父はこんな合の手を入れながら、熱弁を振った。しかし、それは子供たちや客人に聞かせるというよりも、僕には、父が自分に言っただけきかせているように聞こえたものだ。

今、世田谷の実家に行くと、その井上家の歴史の大きな部分を担った食卓が、寂しく居間に鎮座している。

そして、その食卓に眼をやると僕の耳にあのひと言が聞こえてくるのだ。

「えっ、そうだろ、キミ」

図書だより①

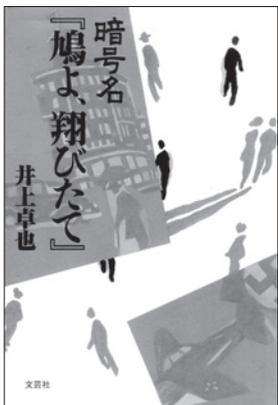
◎二〇〇九年四月以降に発表された井上靖に関係する書籍、雑誌、論文、記事をご紹介します。「図書だより①」は書籍・雑誌、「図書だより②」は論文・記事です。

【書籍】

- 伊吹和子『めぐり逢った作家たち』二〇〇九年四月、平凡社
- 三鬼宏『井上靖の詩の世界』改訂版、二〇〇九年四月、文芸社
- 藤澤全『詩人・井上靖』二〇一〇年九月、角川学芸出版
- 池島信平・嶋中鵬二『文壇よもやま話』下、二〇一〇年十一月、中公文庫

【雑誌】

- 『井上靖研究』第八号、二〇〇九年七月、井上靖研究会
- 『井上靖研究』第九号、二〇一〇年七月、井上靖研究会



◎本誌に「父の休息——家族の撮った写真から」を連載中の井上卓也氏の小説が刊行されましたので、ご紹介します。

『暗号名「鳩よ、翔びたて」』二〇一〇年九月、文芸社

井上卓也

慶應義塾大学卒業。長年、㈱電通にコピーライター、CMプランナーとして勤務。著書に『グッドバイ、マイ・ゴッドファーザー』（一九九二年、文藝春秋）、『神様の旅立ち』（二〇〇三年、アートン）など。

私の 備忘録 より

浦城いくよ

平成二十一年度



平成二十一年度に私が関わった父井上靖および井上家に関する行事について報告いたします。

— 新型インフルエンザが日本にも入って来て世界中で大流行の兆しがあると国中が大騒ぎいたしました。個人的には六回も海外旅行をしました。また年が明けて二月には父の書斎と応接間と書庫が生誕の地旭川に移築されることが決まり、遺族はホッといたしております。

平成二十一年

四月十日

「松本清張展」世田谷文学館にて。オープニングセレモニー、十七時半より。甫壬、承子、いくよ出席。
生誕百年を記念して催されたもので、展示もなかなか良かった。長男ご夫妻が出席され、挨拶をされた。かつて父の代理で松本家の新築披露パーティーに伺ったことが懐かしく思い出される。

四月十五日

旭川市井上靖記念館報に「八十歳になつて輝いた母」を書き終え、投函する。

五月六日

原田真人監督より「わが母の記」の映画化に関するメールが届く。一つの作品を映画にするまでの過程は大変なこと。返事を出す。

五月十三日

真向法協会総会、霞が関ビルにて。十六時半～十八時。いくよ出席。
父は寸暇を惜しんで真向法をやっていた。家族にも勧めていたが誰もやっていない。私も三分で出来る体操なのにどうしても続かない。どこが悪くなくと真向法で治そうと始めるが、いつの間にか止めている。父は食道ガンの手術後でも熱心だった。

五月十六日

息子の義明一家四人を長泉町のクレマチスの丘にある井上靖文学館へ連れていく。

おじいさんの文学館なのに皆初めて。義明は曾祖母のお葬式の翌日一族で出席した開館式以来という。三十六年ぶりなので初めてと同じこと。何十種類ものクレマチスの花が色とりどりに咲いていた。イタリアン・レストランで昼食。そのあと千本浜にある父の初めての碑も見に行く。

息子孫共連れ訪ひし記念館

父笑む写真の迎へくれをり

六月一日

米子の井上靖記念館友の会会報「海鳴り」に近況報告として、さる三月オーストラリアのシドニーで開催された井上靖賞授賞式と「井上靖撮影シルクロード写真と詩展」に出席し、「父のシ

ルクロードへの思いと父の写真」についてそこで皆さまに話したことを書き投函した。

六月二十九日

元モンゴル大使花田麿公氏とユーフォリーブックスの難波多津子さんと私の三人でミーティング。難波さんの亡くなった御主人の蔵書約二万冊をモンゴルのどこかの図書館に寄付したいと花田さんに何年も前から相談しておられた件に加えて、井上靖全集の寄付とブラサルファの何かをやつてはという思いを三人で話し合う。父にはモンゴルのチングスハンを書いた「蒼き狼」という作品がある。昼食をこ一緒した。

七月十日～十二日

旭川行き。七月に行くのは二年ぶり。津村顕照氏に井上靖記念館のラウンジでお目にかかる。この方は浄土真宗の僧侶で香川県から旭川へ布教に来ら

れ、記念館へ浮田要三氏の著書『きりん』の絵本』を届けに来られていた。氏はNHKの「ラジオ深夜便」を聞いて、どなたかが「日本一美しい詩集」と言われたのに感動して手に入れたと話された。著者の浮田要三氏は、子供の詩雑誌『きりん』に、その創刊から十四年間大阪での出版を終了するまで携わった方（『伝書鳩』十号に紹介されている）。私は津村氏との偶然の縁で浮田氏を身近にさせて頂き、お陰で『きりん』創刊当時の父の様子が手に取るように分かった。

七月十九日～二十日

十九日、井上靖研究会、鳥取県日南町総合文化センターにて開催。十五時半より。修一、甫壬、佳子、恒雄、いくよ出席。

* 研究発表

山田哲久「僧行賀の涙」論——典拠と方法について」

*講演

綾目広治「井上靖文学と仏教」

終了後、文化センターの中に軽井沢の山荘の書齋を再現してある部屋と図書館を見学。

宿舎となる日南町営の施設ゆきんこ村で懇親会。生前の父をよく知っておられる矢田治美町長、七瀬英夫氏はじめ役場の方々、町民の方々も出席。食事しながら当時の話を伺う。

二十日、九時半、ゆきんこ村を出発。無人の記念館である野分の館や疎開の家の跡地周辺を見て歩く。生憎雨が降ってきた。

午後、米子市にあるアジア博物館・井上靖記念館を見学。この記念館には世田谷の家の書齋と応接間を模した部屋と展示室がある。友の会の方々を迎賓館の大きな和室でお薄と美味しいお菓子が歓待して下さる。

米子空港に到着した時から二日間、日と松本さんの三人が井上家の書齋および応接間を見に来られる。ゆつくりと見ていただく。甫壬、佳子、いくよ応対。

九月十五日
中国文化フェスティバル開幕式の招待を受け、観劇する。オーチャードホールにて。十八時半より。恒雄、いくよ。中国モンゴル族歌舞「オールドスの婚礼」を見る。中華人民共和国建国六十年、日中文化協定締結三十周年を記念する文化フェスティバル。

九月十七日
石川県内灘町のイベント「内灘砂丘フェスティバル」で、写真家大塚清吾氏との対談を頼まれる。何年か前に佐賀市文化会館で大塚氏と対談をしたことがあるのでお受けする。

南町のご厚意ですつと町有バスを付けてくださった。

山陰に建つ文学館の無人なるも
地の人々の手入れ見事に

七月二十二日
原田眞人監督と松竹のチーフプロデューサーの石塚慶生氏が井上家へ来宅。佳子、いくよ応対。

「わが母の記」の映画化について話を伺う。まだ実現できるかどうかわからないが撮影する時は井上家の一部を使いたいとの希望に、私どもは喜んでお受けするつもり。

八月一日
伊豆市湯ヶ島へお墓参り。母ふみの新盆。
十一時妙本寺集合。法要のあと熊野山のお墓へ。昼食は湯ヶ島倶楽部で。一族二十一名と湯ヶ島からは母をよく知

九月二十二日
『伝書鳩』の「私の備忘録より」の原稿、やっと書き終えメールで送る。二十五日から十二日間のハンガリー・スロバキア・チェコの旅行があるのでとにかくホッとした。

十月六日
国際交流基金金賞授賞式とレセプション、ホテルオークラにて。十六時半より。恒雄、いくよ出席。
国際交流基金の事業の柱である「文化交流」の三部門に対して授与される賞。オーストラリアのこともあるのでどうしても出席したく、海外旅行からの帰宅途中出席した。

十月八日
このところ海外旅行を挟んでの多忙な日程で腰を痛める。先日依頼のあった「内灘砂丘フェスティバル」はまだ一

る城所章氏、相原美和さん、浅田登美子さんにも参加していただいた。

八月七日

旭川市井上靖記念館相談役会、クラブ関東にて。十二時半〜十四時半。
荒川美智館長、長谷川明彦部長、高野昭氏、清水節男氏、いくよ。

八月二十一日

軽井沢高原文庫で「辻邦生展」を見る。恒雄、いくよ。
亡くなってからなんと十年もたつていたとは。

八月二十七日

新横浜プリンスホテルにて長泉町井上靖文学館の松本亮三館長にお会いし、井上家の書齋の移築の件を話してみる。

九月十四日

スルガ銀行の部長さん、鹿島建設の方

カ月前ではあるが治らなさと迷惑をかけることになるので、代わりに弟の卓也に頼む。

十月十一日

母ふみ一周忌、井上家にて。十一時半より。

伊豆市にある井上家のお寺妙本寺より住職来宅。一周忌の法要を応接間で行う。法要のあと皆で父母がいつも頼んでいたお店のうなぎをいただく。母の着物をはじめ、いろいろのものを皆それぞれに選んで形見として持ち帰っていた。大谷光敏夫妻、大谷敏治夫妻、福井喜久夫妻、福田弥生、小山乃り子、野崎公子、今村清子、相原美和母娘。井上家は次郎、裕之、方良夫人を除いて子供、孫、ひ孫の全員が出席。

十月二十日

孫家正中国文連代表団歓迎茶話会、銀座アスターにて。日本中国文化交流協

会招待。十四時〜十五時半。いくよ参加。

十一月四日

「井上靖とシルクロードの集い」伊豆市国民文化祭参加イベント（主催・船原館）。妙本寺にて。十三時半〜十五時。恒雄、いくよ参加。

一部

掛軸「妙法蓮華経観世音」奉納 岩永司明（書家）

二部

*「シルクロード紀行」と「シルクロード詩集」の一部の朗読 渡部雅代

*対談「シルクロードと井上靖 敦煌今昔」志賀建華×篠崎啓史

敦煌出身の志賀さんは父が初めて敦煌へ行った時接待役の一人だった。これを機に日本に興味を持ち、日本語を勉強し、日本へ留学したのちに帰化された。現在旅行会社を経営。文化大革命時代の話など、自分の生い立ちをとて

十一月十九日

福井欧夏油絵展、渋谷東急本店美術画廊にて。

私の従姉の子。日展の特選を取った将来が楽しみな画家。『伝書鳩』のイラストを描いてもらっている。

十二月二日

平山郁夫氏死去。かつて井上靖記念文化財団の理事をしていただき、井上靖文化賞の選考委員としても、大変お世話になった。

十二月六日

井上靖研究会、國學院大學渋谷キャンパスにて。十四時より。甫壬、佳子、いくよ出席。

書齋と父がいつも接客に使用していた応接間の移築前に、研究会の見学希望者の方々三十一名が十一時半に井上家に来宅。ご覧いただいた後研究会までに余り時間もなかったので簡単なお昼

もしつかり話された。

*「父靖のシルクロードへの思い」浦城いくよ

三部

食事と語る会。場所を船原館に移し、温泉に入浴後いろいろでわさび鍋を囲んでの会。

食事をしながら皆さんがそれぞれ靖について話された。井上靖ふるさと会の会員、妙本寺の檀家の方など四十名ほどが参加。岩永夫妻、志賀さん、松本亮三氏と私どもは一泊する。

十一月八日

「こ息が語る文学のふるさと湯ヶ島」伊豆市国民文化祭参加イベント最終回、天城温泉会館にて十三時半より。

甫壬、恒雄、いくよ出席。
川端香男里、勝呂奏、井上修一前半はそれぞれが講演。後半は勝呂氏司会で座談。
とても天気の良い日で終了後希望者は

を用意して召し上がっていただいた。

*研究発表

高木伸幸「宮本輝に見る井上靖の影響」

*講演

伊吹和子「井上靖先生の思い出」
伊吹和子さんは編集者時代によく井上宅に来られていた。「先生は詩そのものの人だった」と話された。

親睦会はキャンパスビルの最上階で渋谷の街がよく見下ろせる場所だった。

十二月十一日

米子の井上靖記念館友の会会報『海鳴り』に近況報告を書き終え、投函する。

十二月十六日

元モンゴル大使花田磨公氏に話を聞く。
佳子宅にて。
難波多津子さん、佳子、卓也、恒雄、いくよ。

バス「踊り子号」が待っていて、湯ヶ

島の紅葉のきれいなところを見に連れて行ってくれた。芝居「しろばんば」劇団の田村千恵美さんがバスガイド役でとても面白く上手に案内された。

十一月十五日

佳子の長男裕之の結婚式、東京会館にて。

父母の孫の最後の結婚式。伯父・伯母のほかいとこ代表で浦城義明一家四人と木村直子一家三人と西村承子夫妻が出席した。

十一月十八日

山本安見子作品展、町田市カフェテラス・エリカにて。恒雄と見に行く。
父と大変仲の良かった評論家の山本健吉氏の娘さん。父母存命中はいつもご両親と三人で井上家へ来られていた昔懐かしい方。

十二月二十日

井上靖ふるさと会の方々二十二名が井上家に来宅。

書齋と応接間をどこかへ移築したいと検討中なので、世田谷にあるうちに見学したいという伊豆の方々が来られる。父母が好きだったうな重を召し上がっていただく。

平成二十二年

一月七日

スルガ銀行岡野社長に新年のご挨拶にいく。スルガ銀行日本橋支店。修一、卓也、佳子、いくよ。

一月八日

旭川市井上靖記念館の中西馨氏、井上宅へ。十四時〜十七時。
中西氏は記念館で館報や展示、読書会などを担当され、館にとっては大事な方。書齋や応接間、書庫の資料などをご覧になった。書物だけでは分からな

いさぎまの心を熱心に聞かれた。
甫壬、佳子、いくよ応対。

一月十四日

「東敦子さんを偲んで」没十周年ガラ
コンサート、町田市民ホールにて。い
くよ出席。
かつて父の詩「残照」（高田三郎作
曲）を熱唱された。招かれて母と一緒
に拝聴したのを思い出す。

一月二十日

松本亮三館長夫人の葬儀、ご自宅近く
の小田原市早川にて。十時半より。甫
壬、いくよ出席。佳子通夜に出席。
生前館長とご一緒に私宅にも来られた
ことがある。大変立派な奥様で、ご自
分の葬儀のご挨拶や式場のことなどあ
らかじめ準備され、友人や知人にはメ
ールでお別れもされ、ご挨拶の最後に
「残された主人のことをよろしくお願
いします」と締めくくられていた。

一月二十二日～二十三日

一泊で佐賀市へ。恒雄、いくよ。
大塚清吾氏の「シルクロードふたた
び」写真展を見る。約二百点の写真が
展示されていた。その写真のどれもが
色彩のきれいなこと、敦煌の仏さまの
表情や衣類などいつまでも見ていたい
気持ちだった。

翌日は大塚先生のご案内で吉野ヶ里歴
史公園の弥生時代の遺跡を見学。その
あと佐賀森林公園にある鑑真和上陸
記念碑と父の碑「若葉して」を見る。
亡くなる少し前に原稿を送ったもの。

十年ぶり鑑真上陸の佐賀訪ひ

父の碑囲む瓊花大きく

一月二十六日

旭川市副市長の表憲章氏が上京された
ので夕食をご一緒する。
表氏は旭川市井上靖記念館が出来た時
の初代の館長で、それ以来親しくして

いただいている。書齋と応接間の移築
に関して私の独断で思い切って表氏に
お願いしてみる。表氏は思ってもいな
かった難題を頼まれたにもかかわらず、
しっかりと受け止めてくださった。

一月三十日

静岡新聞に「井上靖邸 遺族は移築し
て残したい」と写真入りで大きく報道
される。

一月三十一日

「翌檜忌」十時お墓集合。甫壬、佳子、
恒雄、いくよ出席。

自宅を七時過ぎに出て九時過ぎに到着。
いつものように皆さんが来られる前
にお墓の前の瓊花の周囲に寒肥を入れる。
市長さんはじめ、多くの伊豆市の方々
やネットの「野良犬」氏や「ばりばり
蟹座」氏も参加された。修一欠席のた
め墓前で私のご挨拶。瓊花についても
話す。

その後天城温泉会館で「井上靖作品読
書感想文発表・表彰式」。

感想文の発表では湯ヶ島小学校の生徒
の作品の朗読が抜群に上手だった。筑
波大附属中学校の生徒が主人公と自分
が重なったのか泣きながら読んだのが
印象深かった。

昼食は井上靖ふるさと会の方々の手料
理。カレーライスとぬた、白和えなど、
格別においしい。例年のとおりお手製
の「塩あんのおはぎ」も売られていた
のでお土産に沢山買う。塩あんなので
日がもたず、お店では売っていない。
午後は静岡県立静岡がんセンターの山
口建総長の講演があった。

二月五日

石井桃子展、世田谷文学館にて。オー
プニングレセプション、十七時～十九
時。いくよ出席。
石井桃子といえは「ノンちゃん雲に乗
る」を父が買ってくれた思い出がある。

「クマのプーさん」ピーターラビット
のおはなし」など児童文学の発展に大
きな功績を残した方。大変寒い日だっ
た。

二月八日

中国人民対外友好協会代表団歓迎会
（日中文化交流協会主催）、銀座アスタ
ーにて。十七時より。いくよ出席。
陳昊蘇団長は北京市副市長で詩人。

早乙女貢一周忌、東京会館にて。十八
時～二十時。佳子、いくよ出席。

多くの参列者でにぎやかな一周忌。氏
が作家になられてからの写真が並べら
れ、反対側には氏の作品の映画のポス
ターやスタイル写真が置かれ、ビデ
オが上映されていた。等身大の早乙女
氏の写真の前には梅の木がしつらえら
れ、その周囲に参列者は一本ずつ梅を
さしてお参りした。

元旦ごと盆梅くれし人の忌に
母亡き庭の紅白映ゆる

二月十日

旭川市より小池語朗教育長と長谷川明
彦社会教育部長が、先日私が表副市長
にお願いした移築の件で、井上家の書
齋と応接間を早速見に来られた。二階
の写真を置いてある部屋も見ていただ
く。父の生誕の地で井上靖記念館のあ
る旭川市に何とか移築して、記念館の
価値も高めたいと希望を述べる。甫壬、
佳子、いくよ応対。

二月十一日

静岡新聞を見られて移築の件で三島市
役所の企画部長、政策課長、建築住宅
課長、営繕係長の四名の方が井上宅へ。
三島駅南口の前にある楽寿園の中に移
築したいと言われる。有難いお話。甫
壬、佳子、いくよ応対。

二月十五日

静岡新聞を見られて「時之栖」の社長と秘書さんが書斎移築の件で見に来られる。佳子、いくよ応対。

二月十九日～二十日

写真家の大塚清吾氏が佐賀より来られ、三日間にわたって書斎、応接間およびいろいろな遺品の撮影をして下さる。二階に置いてあったネーム入りの古い旅行トランクを見てこれは大事なものだとは早速撮影にかかられた。

三月一日

十四時、旭川市より移築の件で荒川美智井上靖記念館館長、山崎則明社会教育課主幹、稲垣啓社会教育課主任が井上宅に来られた。井上家の昔の設計図を見たり、家の寸法を計ったり、写真を撮ったり、三時間ほど滞在された。寒い日だったが旭川の方々はさすが

「暖かいですよ」と言われた。

三月六日

卓也の知人で六本木で児嶋画廊を開いている児嶋俊郎氏（画家の児嶋善三郎氏のお孫さん）が井上の庭にある松を引き取りに植木屋さんと一緒に来られる。靖の文化勲章のお祝いに池田大作氏から立派な大きな松の盆栽を頂戴した。四国から運ばれてきたと聞いている。父母は枯らしてはいけないと出入りの植木屋さんに頼んで庭に小高い築山を造ってもらいこの松を移植し、大事にしていた。それから三十三年が過ぎ去った。父母も亡くなり、松は国分寺にある藤森照信氏設計の児嶋邸の新居の庭に移され余生を送る。

三十年余守り来し母亡き庭の松請はれ行く新居の庭に

三月十二日

唐家璇中日友好協会名誉顧問と会見。甫壬、佳子、いくよ出席。

日中友好七団体の招きにより一行十名が三月十日から十七日まで日本に滞在。政界、経済界、文化界などの人々と交流。十二時半より東京会館で歓迎レセプションが開かれた。それに先立ち平山郁夫氏と井上靖の遺族が別室で唐家璇氏から挨拶を受ける。唐家璇氏は父が初めて敦煌へ行った時大変お世話になった方。公使として日本に来られた時は着任の挨拶に井上家にも来られている。

三月十九日

移築は旭川市から内定の連絡をいただいたので、三島市役所に先日の申し込みに対しお断りをするために甫壬、佳子、いくよで伺う。

生誕の地旭川へはこちらからお断りしたこと、靖の記念館があり、今までの

経過を説明する。市長も出て来られ残念がって下さった。そのあと移築予定地だった楽寿園へ案内していただき、恐縮した。

午後から三島に住んでいる父の妹静子叔母を訪ねる。九月には百歳になるという。末娘の照子さん夫妻と同居して元気で幸せそうだった。何年も会っていないかったのに私のことを「幾ちゃんね」と言われた。

三月二十五日

井上靖記念文化財団理事・評議員会、山の上ホテル別館。十六時半～十七時半。

会議終了後同室にて和食の夕食を共にする。時代の流れにあわせて、この財団を一般財団へと移行させたい、と伝える。



事業報告

井上修一（井上靖記念文化財団理事長）

平成二十一年度の本財団の主な事業をご報告いたします。

（一）井上靖を記念する文化賞

平成十九年度に十五回を一区切りとして終了した、文学、美術、歴史等の分野において貢献した人・団体を顕彰する「井上靖文化賞」のなんらかの復活を考えています。賞の名称ならびに内容等の変革も含め検討中です。

（二）海外における日本文化の研究者または研究団体に対する援助

「井上靖（奨学金）賞」は平成十八年にオーストラ

リアにおける日本文学の研究奨励のために、設立資金五十万円をシドニー大学に寄付し、設立されたものです。奨学金支給対象者の選考もシドニー大学の井上靖（奨学金）賞選考委員会にお願いしてあります。

平成二十一年度は該当者なく、二十二年六月予定の第四回の選考に向けて準備を行いました。

（三）井上靖に関する遺品・愛蔵品の保存・公開

伊豆市湯ヶ島にある旧井上靖邸跡地及び跡地内の「しろばんばの碑」の管理をするとともに、次のような事業を行いました。

平成二十一年四月一日、資料保存・公開のため、日南町美術館と展示資料寄託契約（三年毎更新）を結び

ました。

平成二十一年四月一日、資料保存・公開のため、旭川市立井上靖記念館と展示資料寄託契約（一年毎更新）を結びました。

平成二十一年六月一日、旭川市『井上靖記念館報』

第九号が、本財団の協賛で発行されました。

平成二十一年六月二十五日、『海鳴り』二十七号（米子・アジア博物館）内「井上靖記念館友の会」会誌が、本財団の協賛で発行されました。

平成二十一年十二月三十日、『海鳴り』二十八号が本財団の協賛で発行されました。

平成二十二年三月十八日から六月十五日、長泉町「井上靖文学館」において、井上靖ふるさと会ならびに本財団後援で「ふるさとの想い、帰還展——特務兵・井上靖、湯ヶ島から出征した人々の記」を年度をまたいで開催いたしました。

（四）井上靖に関する資料の収集及び調査研究

蔵書・資料・アルバム・書簡等の収集整理を行います。

した。特に前項（三）の事業を行うに当たり資料的側面を担当しました。

平成二十二年三月、「井上靖研究会」（國學院大學教授 傳馬義澄会長）の機関誌『井上靖研究』刊行のために十萬円の助成をいたしました。

平成二十二年三月、財団の事務所があります駒場の日本近代文学館にも、資料収集用に十萬円の助成をいたしました。

平成二十二年三月、井上靖の『しろばんば』を上演して十二年になる伊豆市の市民劇団「しろばんば」に、上演資金として五萬円の助成をいたしました。

（五）井上靖に関する講演などの開催

平成二十一年七月十九日、井上靖研究会の夏季研究発表会が鳥取県の「日南町総合文化センター」で行われ、本財団からも参加いたしました。山田哲久氏の研究発表「「僧行賀の涙」論——典拠と方法について」と、綾目広治氏の講演「井上靖文学と仏教」が行われました。翌二十日は井上靖の野分の館、米子のアジア

博物館・井上靖記念館などゆかりの地を見学しました。
平成二十一年十月二十五日、「第二十四回国民文化祭・しずおか二〇〇九」（平成二十一年十月二十四日～十一月八日、主催・文化庁、静岡県、伊豆市他）のイベントのひとつ、劇団「しろばんば」による「しろばんば——家族」が伊豆市の天城温泉会館劇場ホールにて上演され、本財団が後援しました。

平成二十一年十二月五日、井上靖研究会の冬季研究発表会が國學院大學渋谷キャンパスで行われ、本財団からも参加いたしました。高木伸幸氏の研究発表「宮本輝に見る井上靖の影響——物語と抒情の系譜」と、伊吹和子氏の講演「井上靖先生の思い出」がありました。

研究会の前には、世田谷区桜の井上靖邸の見学がありました。

平成二十一年一月三十一日、「翌檜忌」井上靖追悼事業が、伊豆市教育委員会、井上靖ふるさと会主催、井上靖文学館（長泉町）共催、伊豆市、本財団等の後援で催されました。伊豆市湯ヶ島の墓地にて墓参会が

本裕之氏「井上靖 西域小説——狼災記から」

平成二十一年十二月十二日、文学講座、講師・片山晴夫氏「井上靖の魅力をさぐる」

平成二十二年一月二十三日から三月二十八日、企画

展「井上靖最後の長編小説『孔子』展」

平成二十三年一月三十日、文学講座、講師・伊藤一男氏「井上靖の万葉集『夜の声』補注」

○こおりやま文学の森（郡山市文学資料館 郡山市久米正雄記念館）

平成二十一年十月三十一日から十二月六日、特別企画展「ふくしまの文学——中通り・会津編」で井上靖『小磐梯』の原稿、創作ノート、講演用メモなどの展示。

○第二十四回国民文化祭・しずおか二〇〇九

平成二十一年十一月八日、伊豆市の天城温泉会館劇場ホールにて、「第二十四回国民文化祭・しずおか二〇〇九」の中の「伊豆文学まつりファイナーレ」の

あり、引き続き「天城温泉会館」にて、井上靖作品読書感想文コンクール最優秀賞作品の発表と表彰が行われました。また、静岡県立がんセンター総長・山口建氏の講演「井上作品を考える——森羅万象を友として」がありました。

(六) その他

本財団が直接協力したものではありませんが、井上靖に関係するいろいろな行事のご連絡をいただきました。

○旭川市井上靖記念館

平成二十一年四月十一日から六月二十一日、企画展

「老いと死を見つめて——井上靖 晩年の小説」

平成二十一年六月二十七日から九月六日、企画展

「花の絵・花の詩 井上靖——東延江」

平成二十一年十月二十四日から平成二十二年一月十

七日、企画展「井上靖が描いたヒロイン像」

平成二十一年十一月二十八日、文学講座、講師・石

ファイナルイベントとして、「こ子息・研究者が語る『文学のふるさと湯ヶ島』（前半は講話、後半は座談会）、出演者・川端香男里氏、勝呂奏氏、井上修一。

○大塚清吾の写真文化芸術振興推進委員会

平成二十二年一月十三日から二十三日、佐賀市「エスプラッツ」二階にて、「シルクロードと仏の道と日本の文化芸術」の中で、「大塚清吾シルクロード写真展」、十七日には同三階大ホールにて大塚清吾氏「シルクロードと敦煌」の講演、他の講演者の方々のパネルディスカッションなど。

(七) 役員

平成二十二年四月一日現在、本財団の理事、評議員は次の方々です。

理事長 井上修一

常務理事 浦城幾世

理事 井上卓也 相賀昌宏 岡野光喜 角川歴彦

黒井千次 佐藤隆信 高碓芳郎 野間佐和子

三木啓史 三好 徹 山口 建
 監事 水谷大介
 評議員 伊藤 暁 井上甫壬 浦城義明 大越幸夫
 大谷光敏 大波加弘 狩野伸洋 黒田佳子
 小西龍作 佐藤純子 篠 弘 曾根博義
 高野 昭 (五十音順)

尚、本財団設立当初より平成二十一年三月三十一日まで理事を、平成十九年度まで井上靖文化賞の選考委員をお勤めいただきありがとうございました。平山郁夫氏が、平成二十一年十二月二日にご逝去されました。生前の多大なご尽力・ご指導に対し心より感謝いたしますとともに、深く哀悼の意を表させていただきます。



図書だより②

【論文・記事】

- 岩崎陽子「共食と共感——井上靖『しろばんば』より」〔文芸学研究〕二〇〇九年
- 高木伸幸「井上靖文学における大衆性——『氷壁』に描かれた遭難を通して」〔近代文学論集〕二〇〇九年
- 李哲権「井上靖の想像力の世界と海のイメージ——散文詩『少年』を読む」〔研究紀要 児童学部 人文学部 音楽学部〕聖徳大学、二〇〇九年
- 山田哲久「井上靖『漆胡樟』論——〈歴史〉への態度」〔同志社国文学〕二〇〇九年三月
- 坂東省次「井上靖とスペイン」〔イスパニア図書〕二〇〇九年秋
- 井上靖「新発見 井上靖 中国行軍日記〔含 解説〕」〔新潮〕二〇〇九年十二月、解説・曾根博義
- 宮崎潤一「再検証『井上靖文学の西域への源流』——従軍体験から芽生えた源泉」〔視向別冊 群馬の文学・思想・教育〕二〇一〇年
- 茂田さやか「井上靖『黯い潮』論——事実と真実の狭間」〔清泉語文〕二〇一〇年三月

- 曾根博義「井上靖と戦争——従軍日記と戦後の文学をつなぐもの」〔語文〕二〇一〇年三月
- 平山郁夫・井上靖「本誌に載った平山郁夫対談アーカイブス（第2回） 井上靖——文学、絵画、考古学と冒険と……」〔月刊美術〕二〇一〇年四月
- 重里徹也「古代史小説の風景（第2回） 井上靖『額田女王』」〔季刊邪馬台国〕二〇一〇年七月



編集後記

『伝書鳩』十一号が出来上がりしました。遅々として進まない編集に辛抱強く付き合って下さった執筆者の方々に、厚く御礼申し上げます。

発刊がすっかり遅くなってしまったのは、昨年の夏に女の子を産んだからです。

三月十一日、赤ん坊を抱えてあの大きな揺れに遭ったとき、私を含めて周囲にいた大人たちは慌てふためきました。ところが赤ん坊はいつもと同じように奇声をあげています。私は、何があってもこの子を守らなければ、と気を張りました。しかし赤ん坊の平和な佇まいは頼もしく、むしろこちらの気持ち落ち着かせてくれました。

祖父靖には、もうすぐ産まれる予定の子を含めると、曾孫が十四人います。今はまだ宝物のように守られている十四人の曾孫たちが、いつか大きく羽ばたけるよう、この国の復興を願います。

被災地の皆様に、心からお見舞いを申し上げます。

西村承子

伝書鳩 第11号

発行 二〇一一年三月三十一日

編集者 西村承子・西村篤

東京都世田谷区桜三―五―九

印刷所 (株)厚徳社

発行所 (財)井上靖記念文化財団